D.Q.FIGHT

身をよじらせて逃れようとするが、両腕をがっちりとロックされて思うように動くことができない。豊満なゼシカの胸肉が、綺麗な曲線を描いて弾力豊かに盛り上がっている。男はその上に掌を覆い被せた。乱暴に上着を下にずらし、むき出しになった両胸に指を食い込ませると、豊かな乳房が逃げ場を求めて指の間からはみ出てくる。

「はぁ……う」

乳房を押さえつけられ息が漏れる。圧迫感と緊張感でわずかに息が乱れていた。

「やっぱり……胸が感じるようだね少し弄っただけで大人しくなるなんて……」

男は執拗に胸を揉み続けた。時間をかけて何度も何度も揉みしだいた。徐々に硬くなってきた乳首を指先でこねたり、つまんで引っ張ったりして刺激を与える。

「あふ……はぁ……ああっ……」

ゼシカの息がだんだんと荒くなってくる。

さらに男は、ローションをゼシカの胸に振りかけた。

「きゃっ！」

ひやっとした冷たい感触が火照り始めた身体を急速に冷やしていく。

男はローションをすり込むように、
手のひらで大きく胸を撫でつけていった。
「ふ……う……ん……はぁ……」
ヌルヌルとした感触が胸を通して
全身に広がっていく。
服も破られ、
体中にくまなくローションを
塗りこまれる。
ゴツゴツした男の手が、
ローションを潤滑油にして
なめらかにゼシカの身体の上を滑った。
彼女の頬が上気し、
再び身体に熱を帯びてくる。
胸への愛撫だけで、
ゼシカは完全に我を失っていた。

「もう我慢できねえ、このままやってやる！」
倒れたゼンカの上に、
興奮した男の一人が馬乗りになった。
「さっきからプルンプルン揺れてるその胸を、こうしてやりたかったんだ！！」
「いやぁっ！」
わずかに残った体力で逃れようとするが、
太腕の男にのしかかられては身動きを
とることすらできない。
男は掴んだゼンカの乳房を両側から中央によせる。
お椀型に盛り上がってぶるぶる震えていた
肉が、ぴったりと寄せられて深い谷を作った。
もちろんその谷間には男根が挟み込まれている。
男の色欲を読み取った彼女が身を
悶えさせるが、逃れることはできない。
乳房の弾力が、硬くなったモノを
締め付けるばかりだ。
「たまんねえな……
挟んだだけでイっちまいそうだ」
ずず……と、気持ちよさそうに緩んだ顔で
男は前後に腰を動かし始める。
「ん……んぶ……」
谷間を突き抜けてくる肉棒の先端が、
ゼンカの顔面に迫ってきた。
気持ちの悪い柔らかさが、ゼンカと
望まぬ口づけを交わす。
「んんん――――っ！！」
男が、呻き声を上げながら大きく
腰を動かしてきた。
「あう……いやっ！！」
まもなく発射されるであろうことを予感して、
ゼンカは顔を背けようとする。
だが、いくら背けたところで、顔いっぱいに
それがかかるのを避けることはできない。
「くう……イクぜ！！」
ぶるぶるっと、男の身体がわずかに
震えたのが胸を通して伝わってくる。
そして、ゼンカの顔をめがけて、
大量の白濁液が降りかかった。

「このクスリはなかなか手に入らないんだ。
お前はずいぶんとラッキーなんだぜ？」
そう言って、男はゼシカの菊門に持っていたクスリを塗りたくった。
「く……ぅ……」
虫が這い回るような感触にゼシカは顔をしかめる。
身体を縛られて、身動きをとることができない。
「どれどれ……。結構高いからな、これくらいで十分かな」
「あぶぅ……」
すでにゼシカはメロメロだった。
身体はすでに大量に発汗し、目が宙を泳いでいる。
「へへっ、さすがの即効性だな……」
男はゼシカのお尻に手を伸ばした。
「きゃうんっ……！」
手の平が触れただけで、ゼシカの身体は跳ねた。
「効き目も申し分なし。これはたっぷり楽しめそうだ」
ぴちぴちとおさと音を立てるように尻肉を叩いた。
さらに何かを塗りたくるようにしつこく撫でつける。
「あっ……あぁぁっ！　……やぁっ！！」
ゼシカの身体が激しく反応している。
男の指が、後ろの穴に触れると、ひときわ激しく身体を震わせた。
「ここりゃすげぇな……びしょびしょだぜ」
ゼシカの割れ目は、すでに愛液で大洪水だった。
「せっかく高いクスリを使ったからな……
しばらく遊ばせてもらうとするか……」
男はニヤリと笑って、再びゼシカの身体に手を伸ばした。

「では、最初は俺がいただくとしよう」
「いやっ……」
わずかに抵抗を試みるが、
すでに身体はいうことを聞かなかった。
いよいよその時がきたことを感じたゼシカは、
目を瞑り、緊張で身体を固くしていた。
つぶぶぶっ！
「ん、く……！　うううっ！」
思わずあげた呻き声は、
股間を内側に引っ張られるような強引な
挿入の痛みによるものだった。
身をよじるゼシカを押さえつけ、
男はかまわず腰を動かす。
上下のピストン運動にあわせて、
胸がゴム鞠みたいに大きく揺れた。
「へへへっ……ボインボインいってやがる。
いやらしい身体だな？」
男は再び両手を伸ばし始める。
「ひあっ……あふぅ……んんっ……」
たぷたぷと男の両手の中で乳房が踊った。
さっきまで散々弄ばれた感覚が、
ゼシカの身体に蘇ってくる。
「ああっっ……ひああっっ！　ぐうううっ！！」
「そうかそうか、そんなに気持ちいいか。
まだまだ後が待っているんだ。
心配しなくてもまだまだ終わらんよ……」
徐々に大きくなっていく喘ぎ声に、
男は満足そうに呟いた。

脱いに放れたアリーナは、
「人組の男に人気の無い廃屋に連れ込まれていた。
「あ……あなたたち！　いったい何をするつもり？」
「おやおや、さすが噂通りの気の強い姫様だ」
「見貴好みなんじゃないか？　こういうの」
会拾たっぷりの見貴分に、
小柄な弟がへへっと気味の悪い笑みを浮かべる。
（ふたりとも……今度こそ叩きのめしてやるわっ！）
ベッドから起き上がり、男たちに殴りかかる。
……が、そのパンチにいつもの力はなく、
ポスッと男の胸を押すのが精一杯だった。
「おっと、
クスリで力が出ないようにしてあのまずよ。
また暴れられちゃかないませんからね」
「そういうこと。
大人しくしとくのが身のためってやつさ」
後ろに回りこまれ胸や股間をいやらしいタッチで
触り始める。
「いやっ！！！」
毒に冒されたような嫌悪感。
しかし、クスリのせいで強く抵抗することができない。
男の手を引き剥がそうとしても、
まったく動く気配はない。
アリーナの恥部は見知らぬ男の手によって
完全に占拠されていた。
「やめなさい！！私が誰だか分かってるの！！！」
「うるせえなぁ…」
もう一人の男がニヤニヤしながら
アリーナの口にテープを貼った。
アリーナは声での抵抗さえおさえられてしまう。

「お姫様ってことはまだ男も
知らねぇんだろうな」
アリーナの閉じていた両足を無理やり
大きく開かせて、舐め回すように観察する。
まだ薄い茂みの奥に、まだ誰にも
侵されたことのない割れ目が覗く。
(やめてっ！　見ないでっ！)
必死に抵抗しようとするアリーナ。
だが、それを嘲笑うかのように男は
股間に顔をうずめて舌で舐め始めた。
「んんんっ！」
ざらついた舌の感触がたまらなく
気持ち悪くて、アリーナは必死に
腰を浮かして逃げようとする。
その反応がかえって男の加虐心を
煽ってしまう。
「この反応、やっぱり処女だな」
わざとアリーナの羞恥を煽り、
何度も何度も舌を這わせていく。
(こ……こんな……許せない……)
こみ上げる怒り。だが、気持ちとは裏腹に
身体は熱を帯びてくる。
(わたし……なんで……？くやしい！)
「おい、兄貴。お姫様濡れてきちゃったよ。
入れちゃっていい？」
「好きにしろ、
おまえは本当に処女が好きだな」
弟がズボンを下ろし、
すでに大きくなった自分のモノを
アリーナに見せつけるようにして
立ち上がる。
そして一気に、アリーナを、突き破った。

「……っ！！！！」
今まで味わったことの無い痛みが、
アリーナの身体を突き抜ける。
「どうだ、痛いか？すぐ気持ち良くしてやるよ」
弟はおかまいなしに腰を前後に動かし始めた。
悲鳴を聞くため口のテープをはがすと、
アリーナの口から男の思い通りの声が発せられる。
「いやぁっ！痛い！抜いてっ！！」
悲鳴を聞くほどに男は興奮し、
よりいっそう腰の動きを早めていく。
「へへへっ、さすがおてんば姫様。しまりがいいな！」
（こんな……ひどい……くやしいよ……）
身体の痛みに、男たちの卑劣さに、
そしてそれに抵抗できない自分に、
どうしようもない怒りがアリーナを苛んだ。
「ほらっ、もっと腰を動かせ！」
四つん這いにさせたアリーナの下から、
弟が罵声を浴びせかける。
（くやしい……くやしい……こいつら……
絶対、許さないんだから……）
目に涙をいっぱい溜めながら、
アリーナは呪文のように念じ続けている。
身体の自由を奪われたアリーナは、
玩具のように弄ばれ続けた。
何度も何度も突き上げられ、
何度も何度も望まぬ絶頂を迎えさせられている。
「あっっっ……あああああっっっ！！！」

「ほうら、またイった。
インランなんだなぁ、アリーナ姫様は」
「……！！」
弟の嘲笑に、視線だけででも抗議をするアリーナ。
「お、またそんな目をする元気があるんだな。
兄貴！　もうちょっとお仕置きが必要なようだぜ？」
「そうだな……ではこっちも参加させてもらうか……」
そういうと、アリーナの空いているほうの穴……
アナルへと自分のモノをあてがった。
「そ……そっちも……やめてっ！！！」
アリーナの拒絶を無視して、兄は躊躇もなく突き入れた。
「いやあぁぁぁぁぁっ！！！！」
「ははっ、二つともちゃんと入っていますよ、
お姫様。あなたには素質があるようだ」
そして、前後に動かし始める。
「おらっ、こっちももっとくれてやる！」
弟も呼応するように再び腰を動かし始める。
「いやっ……あっ……ああっ！！」
二つの異物が不揃いにアリーナの中を暴れている。
「ひぃっっ！　い……やぁっ！　あひぃ！」
くちゅくちゅとイヤらしい音が室内に響き渡る。
〈いやぁ……こんなの……ぜったい……
助けて……クリフト……ブライ……〉
アリーナの心の絶叫は、もちろん届くはずも無かった。

蝋燭の僅かな灯りだけの暗闇に
一人取り残されたビアンカ。
彼女の不安が形になったかのように、
布を擦るような音が暗闇から聞こえてくる。
（な……なにっ？）
部屋の四隅から忍び寄ってきたのは、
無数に分かれた触手だった。
（こ……これって……魔物！？）
触手はまっすぐにビアンカに向かってくる。
足に触れて、絡みつくように彼女の身体を
上ってくる。
（やだ……気持ち悪いっ！）
にゅるにゅると湿った嫌悪感に
顔をしかめる。
しかし触手はお構いなしに上ってくる。
そして、生い茂ったビアンカの茂みに
到着すると、かき分けるように中に
押し入り始めた。
（な……ちょっと……そんなところに……）
魔物も人間の女性に
興味があるんだろうか…？
などと考えるほど今の彼女に余裕はなかった。
生暖かい液体を分泌させて、
ビアンカの秘裂を擦りあげるように
動き始めた。
「きゃうっ！」
くりっとした肉芽に触れられて、
ビアンカは小さく声を上げてしまう。
（な……なに？　身体が……熱い……）
触手の先端がちろちろと割れ目をなめると、
秘裂から愛液が溢れ出てしまう。
（わたし……感じちゃってるの……？）
そんな……）
ビアンカは顔から火が出そうなくらい
恥ずかしかった。
魔物に弄られて感じてしまうなんて……。
実はそれは触手の分泌液のせいでは
あるのだが
彼女に冷静な判断力は残っていなかったのだ。

十分に濡れそぼった割れ目に、
いよいよ触手が侵入を試みてくる。
ぐちゅっ……。
伸縮を繰り返しながら、
徐々にビアンカの膣内に入り込んでくる。
「んはぁっ……はぅぅぅっ！」
痺れるような快感が、ビアンカの身体を突き抜ける。
伸び縮みする触手が膣内の壁を擦りあげて、
普通の挿入とは全く違っていたのだ。
じゅるじゅるっ！

さらに触手は、ビアンカの膣内で吸引を始めた。
「あぅぅぅっ……そんな……だめ……！！！」
初めての感触に、必死に抵抗しようとするビアンカ。
だが、快感の急所を押さえられた彼女は
身体に力を入れることすらままならない。
（もう……だめ……だめぇぇぇっ！）
ビクビクッと身体を震わせながら、
ビアンカの意識は混沌の中に沈んでいった。

全裸にされたビアンカの周りを、
男達が取り囲んでいた。
みな他国の役人達だった。
なかにはかなり身分の高い者も交じっていた。
「ほう……
これがグランバニア新王妃の
身体ですか。若くて張りがあって……」
男の一人が、ビアンカの太ももに手を伸ばす。
「な……なにをするの！
やめなさいっ！！」
身をよじって逃れようとするが、
周りの男達に手足を押さえつけられてしまう。
そして、それを合図に、
手の空いた男達が次々ビアンカの身体に
手を伸ばしてきた。
「やめなさいっ……やめてっ！」
豊かな乳房に男達の指が食い込む。
指先で先端の乳首をいいように弄られている。
「おや、もう乳首が立ってきてますよ？」
前後　左右　そして下からも無数の手が
ビアンカの白い裸体から
快感をしぼりだそうと
卑猥な攻撃をしかけてくる。
なんとか体をよじって逃げようとしても
逃れた先にはまた別の手が待っている
まさに快感のアリ地獄状態。
上半身は首筋舐め、胸もみ、乳首舐め…
下半身は太ももも舐め、指入れ、アナル責め…。

今後はベッドに大の字でおさえつけられる、
立ったままの状態よりもより多くの手がビアンカの肌をまさぐり始める。
「ほほっ、次は私の番ですよ」
「ほんとにたまりませんな……柔らかくて、スベスベしていて……」
男達は、容赦なくビアンカの身体を蹂躙していく。
何十という指先が、
彼女の首筋を、乳房を、乳首を、お腹を、下腹部を、太ももを、足先を。
ビアンカの心を細かく擦り潰すように、余すことなく浸食し続けた。

もう何時間も責め苦を受けていた。
何人もの男たちが代わる代わる
彼女の身体を玩具にして遊んでいるのだ。
「あぁっ……んあっ……はぁ……んっ……」
「どうです？　気持ちいいですか？
もっともっと弄ってあげますよ」
男が嘲笑いを浮かべながら
ビアンカの秘所に指を出し入れしている。
粘れることなく溢れ出す愛液が、
侵入物をスムーズに受け入れている。
「お、またイキそうですか王妃？
遠慮しないでどんどんイっていいんですよ？」
「ふあぁぁぁぁっ！！！」
ビアンカの身体がブルッっと痙攣して、
くったりと力なく崩れ落ちる。
「おっと、まだお休みには早い」
男は強引にビアンカの身体を起こすと、
ぷっくりと充血した肉芽を指でつまんだ。
「ひいっ……！！！」
悲鳴とともにビアンカの身体が
ビクッっと跳ね上がる。
「あひいっ……ひぐぅっ！！！」
すでに何度も弄られた肉芽は、
すり切れたように赤くなっている。
快感と痛みが入り交じった電流が、
ビアンカの身体を突き抜けているのだ。
「あふぅっ！　ひぐっ……！　ひいっっ！！！」
壊れた玩具の上ように身体を震わせている。
すでにビアンカは正気ではなかった。
「ああああああっっっ！！！」
そして、ほどなく絶頂に達する。
「さて、そろそろ私もイッて終わりにするか……」
はちきれんばかりに屹立したモノをビアンカの
秘所にあてがいながら、男は耳元で呟いた。
「心配しなくてもまだまだ後がつかえる男は来る……
続きはそいつらに可愛がってもらいなさい……」

「女なんてこんなもんさ。
股ぐらに突っ込まれればこのとおりだ」
股ぐらに手を這わせた男は
羞恥心を押し広げて膣口を露わにして見せた。
（勝手な……ことを……いわないでっ）
お尻を高く突き上げた屈辱的な姿勢を強いられながらも、
ビアンカは表情だけは崩さない。
だが、それももう限界に近かった。
もう何時間も身体中を愛撫され、
割れ目からは愛液がとめどなく滴り落ちている。
望まぬ快感が、徐々にビアンカの壁を崩し始めていた。
「そろそろ本番にいかせてもらおうかな」
男はニヤニヤと薄笑いを浮かべながら、
わざとビアンカに宣言するかのように言い放つ。
（くっ……）
男がズボンを脱ぐと、硬く反り返った肉棒が露わになる。
見事なまでに大きくそびえ立ったペニスは、
ビアンカに少なからず恐怖を与えた。
「だめ……やめてっ……」
怖かに見せた弱気を、男は見逃さなかった。
「どうしたの？　旦那のより大きくてビックリしたかい？」
意地悪く笑いながら、ゆっくりと腰を下ろしてくる。
そしてビアンカの入り口をこじ開けるように、
男の肉棒が侵入をしてきた。
巨大な圧迫感が、膣内を擦りあげるような感触。
男のペニスがゆっくりとビアンカの中を行き来し始めた。
「くぅ……痛いっ！……」
秘裂が破れてしまうかのような痛みに思わず顔をしかめる。
「しばらくすればこれが気持ちよくなる」
男の声は、ビアンカに届かなかった。
ただ身体の中の痛みと異物感に目を閉じて耐えていた。

「ひゃうっ！！」
突然走った電撃に、身体が跳ね上がる
クリトリスを摘まれ、
皮を剥かれて肉芽がむき出しにされたのだ。
「ひうっ！　ああぁっ！！！」
指先でくにくにと弄られる度に
背中が反り返りふく上かな乳房が揺れた。
すでにビアンカの身体も心も、
抵抗をする力が残っていなかった。
男のペニスで突き上げられては、
大きく身体を震わせることしかできなかった。
「あうっ……ひぁうっ！！！　んふぅうっ！！」
踊るようにビアンカの声が部屋に響き渡る。
頭の先から引っ張られるように、
ぐいぐいと快感が頭の中を真っ白に染め抜いていく。
（こんな……もう……
イッちゃう……だめぇぇぇっっっ！！！）
「いやぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」
破裂しそうなほどに蓄積された快感を
放出するかのように、
こらえきれずにビアンカは絶頂を迎えた。

「お待たせいたしました！
本日のメインイベント！
あのモンパーパラの
踊り子マーニャの妹、
ミネアによる
ストリップショーです！！！」
「……！！！！！」
観衆の好奇の目が
舞台上のミネアに注がれる。
「おい……マーニャの妹だってよ」
「そういえばそっくりだな……」
「妹ったって、こっちは素人だろ？」
「へへへ……
そっちのほうが楽しそうじゃん」
観客のざわめく声が聞こえる。
そして、舞台の袖から
二人の男が現れた。
「マーニャの妹らしいな……
確かに姉に似て
キレイな顔をしてやがる……」
「どっちでもいいさ、
さっさとお楽しみと行こうぜ」
二人の男は、
躊躇いもなく慣れた手つきでミネアの
衣服を無理矢理引きちぎった。
「いやっ！！」
ミネアは羞恥で気が狂いそうになった。
ただでさえ人前に出ることは
苦手だというのに、知らない男たちの
前で肌を曝すなんてもってのほかだ。
かろうじて両腕で
胸と下腹部を隠してはいるものの
ミネアにとっては耐えられない
屈辱だった。
「おーい、どうしたー！」
「見えないぞー！手をどけろ！！」
観衆のヤジが、
ミネアを激しく攻撃する。

二人の男がミネアの体をまさぐり始める。
「く……やめなさいっ！　いやっ！！」
ミネアの褐色の肌が波打つ度に、彼女の
口から声が漏れる。いまだ経験のないミネアは、
初めての感覚に我慢をする術を知らなかった。
数分もしないうちに、
ミネアの局部から愛液が滴り落ちてくる。
「お前も姉と同じで、
見られながらされると興奮するんだな」
男の意地の悪い囁きに、ミネアは真っ赤に
なってしまう。男の一人がミネアの前から
自分のモノをあてがった。
「じゃ、俺はこっちの穴をいただくとするかな」
もう一人が後ろから、
ミネアの後ろの穴に滑り込ませる。
「いやぁっ！　やめなさい！！！
　やめてっっ！！！！！」
「そら、いくぞっ」
そして、ミネアは両方の穴を同時に犯された。
「あああああああぁぁっっっ！！！！」
ミネアの身体は電気を流されたように後ろに
仰け反った。異物が自分の身体を貫く感覚が、
下腹部から脳天へと突き抜ける。
「いやぁっっ！！　やめてえええ！！！」
前後から男の身体に挟み込まれ、
おぶわれた子供のように上下に揺らされている。
「あひっ……ひあああぁっ！！！　きやぅっ！！！」
「いい反応じゃないか。素質あるんじゃないか？」
地に足がつかないミネアは身体に力を入れる
ことができない。男たちが身体を揺さぶる度に、
二本の剛直がミネアの身体の芯まで突き上げる。
「そろそろ……イクぞ！」
「俺もだ！！！」
ドクっと生暖かい弾丸がミネアの中に放出された。
「いやぁぁぁぁっっ……」
ミネアの声は、観衆の歓声にかき消され
だれにも届くことはなかった。

舞台での最悪のショーが終わったあとも
陵辱の宴は終わらなかった。

「いやっ！！　やめなさい！！！」
必死に髪を振り乱し、
挿入された男のモノから逃れようと抵抗をするミネア。
しかし、両腕をしっかりと掴まれて引き戻されてしまう。
「ほら、逃げられるんなら逃げてもいいんだぜ？
　逃げられるならな」
「く……！　さっさとこの手を離しなさい！」
掴まれた手首を振りほどこうとするが、
男の力には敵わない。
逃れようとする度に引き戻され、
根本までモノを咥えこんでしまう。
ミネアは男の掌の上で踊らされているのだ。
謀られたピストン運動を繰り返すうちに、
ミネアの精神が徐々に蝕まれていく。
「あっ……はぁっ！！！　あひいっ！！　ひぁあ！！！」
先端がミネアの奥を突き上げる度に、
ミネアのいから声が漏れる。
「どうした？　逃げないのか？　ほらっ」
男はときたま手首の呪縛を緩め、
ミネアに脱出の機会を与えた。
もちろん、それは罠だ。決して逃がしはしない。
押さえつけ、引き戻してミネアの中を掻き回す。
「ひっ……ひぐぅぅ……あふぅっ！！！」
逃げられないという絶望と、
望みをつなごうとする希望と。
そして、その境目を激しく揺さぶる快感が
ミネアの中を渦巻いていく。
（まだ……まだ、機会はあるわ……）
　逃げてみせる……ぜったいに……）
その希望すらも用意されたものであることに
気づかないまま、ミネアはこのまま犯され続ける……

「さぁ！　今夜のステージは踊り子マーニャのストリップショーです！存分にお楽しみください！」
支配人の合図とともにステージにライトが当てられた。全裸にされた上に両腕を縛られたマーニャの姿が浮かび上がる。
「いいぞー！！！」
「待ってました！」
「早くやれー！！」
観客席から好色な野次が飛び交う。そして、ステージの横から筋肉質の男が現れた。
「ほう、いい女じゃないか……こりゃ楽しめそうだ」
男はマーニャの肢体を眺めながら、舌なめずりをする。
「……やるならちゃっちゃってやっちゃってよ……」
強がりを言うマーニャの口調に力は無い。男は、マーニャの形の良い豊かな胸を後ろから鷲掴みにした。クリクリと人差し指で乳首を弄る。
「くっ……ヘンタイ！」
「くく……そういきり立つなって。じきに良くなってくるさ」
言いながら、手を下腹部へと伸ばしていく。
「コラっ、触るなスケベ！！」
「うるさいお嬢ちゃんだな……ま、その方が犯し甲斐があるってもんよ」
指でマーニャの割れ目をなぞる。
「あうっ！」
「へへっ、やっぱり触れば感じるんだな。気持ちいいならずっと触っててやるよ」
思わず上げた声に、男はニヤ[illegible]
「いや……やめてってば……[illegible]」
そして徐々に湿り気を帯びてくると、男は[illegible]
「淫乱だな。こんなに[illegible]ルでるっていうのさ……」
「う……うるさいっ」
「ほら……お前は見[illegible]
男はいきり立つ自[illegible]
「んあああ！！」
身体をくの字に[illegible]マーニャ。[illegible]
「ほら、お客さ[illegible]
夜の地下劇場[illegible]

「んぐ……むぐ……」
マーニャの口には強引に男のモノが突っ込まれている。
口内は唾液で一杯になり、息をすることもままならない。
マーニャは呼吸をするためにあえてフェラを
し続けなければならなかった。
「いいぞ……おもいっきり吸い付いてくる！」
（好きでやってるんじゃないわよ！）
「おい、早くしろ！後がつまってるんだ！」
「まあ待てって、もうちょっとだ……くうう！」
男は息を吐きながらマーニャの口内に発射する。
「……むぐぅ！！」
口の中に広がる強烈の苦味にマーニャは顔をしかめた。
「ほらっ、休んでる暇は無いぞ！　次は俺のだ！」
「手が止まってるぞ！しっかりシゴけ！」
男たちの罵声が、容赦なくマーニャに浴びせられる。
（くやしいわ……
なんともなければ怒鳴きのめしてやるのにっ！）
キッと自分を陵辱している男たちを睨み付ける。
「まったく……まだ自分の立場がわかっていないようだな」
男の一人がマーニャの膣内を強引に掻き回す。
「んあああぁっっっ！！！」
「そうそう、大人しくしとけよ」
隣の男が身体を揺わせ始める。
「お、俺もうイきそうだ！」
同時に、マーニャの髪の色に大量の精液がかけられる。
（いやっ！気持ち悪い！！！）
私いのけようと髪を振り乱すが、粘液はかえって
絡わりつくだけだ。
「ほらほら、次は俺のをしっかりシゴいてくれよ！」
「俺もだ！まだまだイキ足りないからな！」
「ほら！口が止まってるぞ！舌もしっかり使え！！！」
その間も、容赦なくマーニャに精液が降りかけられる。
（もう疲れた……もう嫌……誰か助けて……）
陵辱な宴は、まだまだ続く……

「あっ……あん……いやっ……やめてっ……！」
クリクリと両手を弄ると、その度にアリーナは過敏に反応をあげる。
さらに、触手が割れ目の間へと侵入を始めた。
狭い入り口に最先にと何本もの触手が入り込もうとしている。
すでにしっとりと濡り気を帯びてきていたアリーナの秘部は、じわじわとではあるが侵入の侵入を許し始めている。
「いやぁ……入ってこないでっ……ためぇっ！」
ずぶずぶと触手が突き上げてくる。快感の波が、抵抗と拒絶の意識を洗い流
膣内に異物が侵入してくる感触。熱病にうなされているように身体は火照って
「ひぐぅ……ふっ……ふわぁぁっ！！」
ズンズンと触手が突き上げてくる。快感の波が、抵抗と拒絶の意識を洗い流
（もう……だめ……なにもわからなくなっていく……）
快楽のベッドに沈む黄の意識。アリーナの意識がなくなったあとも続けら

「あっ……ちょっとなにするの！　〈ンタイ！！〉」
男はゼシカの敏感な部分に瓶の中の液体を塗りたくっている。
「あら、あんまり暴れないで、気持ちよくなるクスリよ」
「ちょっ……なんてもの塗ってるのよ！　やめてっ！　やめなさいってば！」
「たっぷり可愛がってあげるから……」
「だれがあんたなんかに……！」
「心外だわぁ……でも、残念ながらあたしじゃないの……すぐわかるわん」
男はゼシカに一通りクスリを塗りおえると少し離れた場所に座った。
しゅるしゅる……。
暗闇からなにかが這いずる音が聞こえる。
〈な……なに……？〉
ぴたっと、なにかがゼシカの肌に触れた。
〈やだっ……ヌルヌルしてる……触手！？〉
「あら、もう寄ってきちゃったの？　そのクスリにはその子たちが大好きな液体を混ぜてあるの。たっぷり可愛がってもらいなさいね」
触手は一斉にゼシカの敏感な部分に襲いかかった。
「い……いやっ！」
身体をよじらせて抵抗するが、すぐに触手が絡みついてきて自由を奪われてしまった。
「ひやっ！！」
うねうねとした触手がゼシカの下腹部で蠢いている。ぴちゃぴちゃと、クスリを塗られたゼシカの割れ目をなめるように這いずり回る。
「いやっ！　あっ……ひぅっ！！」
ずりずりと、触手が動く度にゼシカの身体が跳ね上がる。
「あん……ひぐぅっ……はぅっ……！！」
男はしばらくゼシカの痴態を愉しんだ後、彼女をそのままにして部屋を後にした……。

「ここは……いったい……？　……きゃあっ！」
意識を取り戻したミネアは、
身体にまとわりつく気持ち悪い感触によって一気に覚醒した。
周りは真っ暗で何も見えない。
わかっていることは、体中に湿った生き物が
まとわりついていることと、
そして自分が足も伸ばせないほどに狭いなにかに
押し込められているということだけだった。
「な……なに？　いやっ！！　いやぁぁっ！！」
暗闇の中で蠢く何かは、ミネアの身体に巻き付いて
這いずり回っている。
恐怖と嫌悪でミネアはパニックに陥っていた。
だが、すぐに自分が置かれている状況を思い知ることになる。
四方を囲む壁が、徐々に透明度を増してきたのだ。
そして硬直したミネアの目に飛び込んできたのは、
さらに驚くべき光景だった。
壁の向こう、ほんの数十センチの距離の先に、
マントと仮面で全身を隠した男たちが
自分を食い入るように見つめていたのだ。
（あ……あ……）
身体にまとわりつく気持ち悪さも忘れて、
自分を見つめている男たちに恐怖していた。

気味の悪い音を立てながら、ミネアの身体に巻き付いていた触手が活発に動き出した。
（いやぁっ……気持ち悪いっ！）
顔をしかめて身をよじるが、服の内は身動きがとれないほど狭い。抵抗することもできず、ただ甘受するしか術がなかった。男たちは一言も口をきかずに、ただミネアを見下ろしている。それがまた気味の悪さに拍車をかけていた。
「あぁっ……」
触手の先端がミネアの乳首に触れた。不自然な態勢は、身体に力を入れることを許さない。さらに触手は、ミネアの下腹部にも伸びてきた。何かを確かめるように、先端を割れ目になすりつけている。
「あ……ん……そこは……ふわぁぁっ！」
耐えきれずに身体を震わせると、触手たちはそこがミネアの弱点であると悟ったように一斉に襲いかかってきた。
（だめ……やめて……入ってこないで……）
触手は容赦なくミネアの秘所を責め立てる。すべての穴は塞がれ、充血した肉芽にも刺激を加えている。
（ああ……だめ……声が出てしまう……）
ミネアは、周りから何人もの男たちがこの痴態を眺き見ていることを忘れてはいなかった。声を出さないようにすることが精一杯の抵抗であったが、もはやそれを我慢することもできそうにない。
「……ぁぁ……ぁぁ……ん……」
徐々に漏れてきた声に、外の男たちの気配が色めきだつのがわかる。
（こんな……こんなことを……）
見られている……。薄い透明な壁を隔てたすぐ先で、男たちが自分の痴態をのぞき見ている。羞恥心が、ミネアの身体をより一層火照らせていく。
「おい、そろそろイきそうだな」
ボソリと……。壁の向こう側から聞こえてきた男の声が、ミネアの最後の壁を破壊した。
「ふぁぁぁぁぁっ！！！」
ビクビクッ！
身体の震えを止めることができず、絶頂を迎えた……。

男が合図を守ると、また別の触手が暗がりから[illegible]い身体を絡ませ[illegible]さん、張りのある胸を掴み上げるように巻きつき、先端が突起を器用に[illegible]り絡ませた。

「ん……」

思わず漏れてしまった声に、マーニャは赤面してしまう。

（なんか変……たったこれだけのことで……）

「乳首が随分感じてるじゃないか……」じゃあ両方同時に[illegible]てやろうか？」

触手は増殖し、マーニャの両乳首を優しく愛撫し始めた。

生暖かい湿り気を帯びた触手が乳首の先端に触れるたびに、マーニャの身体に[illegible]刺激が走る。

「くぅ……ひ、[illegible]……あん……」

クスリを盛られたと……ん……女を満足させられないなんて……ゆ……」

「そうかなぁ？　まあ中に直接入ればそんなことも思わなくなるさ」

触手が器用に肉ヒダを掻き分け、中へと侵入していく。

「あ……ん……ひっ、ひっいい！　ああああっ！」

クチュクチュと淫靡な音を立てて進む度に、マーニャの[illegible]

意識が徐々に快感の波にさらわれていく。

「あああああああぁっあっあっあああ！！！」

絞り上げるような声を上げて、マーニャの意識は遠のいていった。

身をよじらせて逃れようとするが、両腕をがっちりとロックされて思うように動くことができない。豊満なゼシカの胸肉が、綺麗な曲線を描いて弾力豊かに盛り上がっている。男はその上に掌を優しく被せた。乱暴に下着を下にずらし、むき出しになった両胸に指を食い込ませると、豊かな乳房が逃げ場を求めて指の間からはみ出てくる。

「はぁ……う？！」

前後左右　そして下からも無数の手がビアンカの白い裸体から快感をしぼりだそうと単調な攻撃をしかけてくる。なんとか体をよじって逃げようとしても逃れた先にはまた別の手が待っている。まさに快感のアリ地獄状態。上半身は首筋舐め、胸もみ、乳首舐め…下半身は太ももを舐め、指入れ、アナル責め…。

「な……なに？　いやっ！！　いやぁぁっ！！」暗闇の中で蠢く何かは、ミネアの身体に巻き付いて這いずり回っている。恐怖と嫌悪でミネアはパニックに陥っていた。だが、すぐに自分が置かれている状況を思い知ることになる。四方を囲む壁が、徐々に透明度を増してきたのだ。そして硬直したミネアの目に飛び込んできたのは、さらに驚くべき光景だった。壁の向こう、ほんの数十センチの距離の先に、マントと仮面で全身を隠した男たちが自分を食い入るように見つめていたのだ。（あ……あ……）

戦いに敗れ、胸を弄ばれ、犯されるゼシカ。　他国の役人たちの秘密のパーティで肉人形としてあつかわれる王妃ビアンカ。舞台上で見世物にされながら陵辱されるミネアとマーニャ。力が出せず、二人組の男にいいようにされ　屈辱のアリーナ。クリムゾン初のフルカラー同人誌。

●18歳未満の方は購入できません